新潟県小中学校教頭会
会報
No. 204

目　次

●巻頭言 ---------- 1
●全公教高知大会参加報告 ---------- 2
●特集 ---------- 3～4
●郡市教頭会ネットワーク ---------- 5
●新入会員の声 ---------- 6
●随想 ---------- 7

悲観的に準備し、楽観的に対処せよ

新潟県小中学校教頭会
副会長　浅　山　　景
（妙高市立斐太北小学校）

本年１月１日に能登半島地震が発生しました。石川県だけでなく本県においても多くの方が被災されました。被災された方には改めてお見舞い申し上げます。年末年始休業期間でありながらも、児童生徒・職員の安否確認、校舎校地の被害状況の点検、避難所開設の協力等にあたられた本会会員は多かったはずです。また、８月末には観測史上最強と言われた台風 10 号が、沖縄県と西日本を縦断し、甚大な被害が出ました。今後も自然災害が頻発すると予想されており、管理職には高い危機管理意識が求められていると痛感しています。

児童生徒の生命の安全を確保する学校においては、防災に対して次の５つの取組が大切であると、私は考えています。

１．定期的な避難訓練：地震や火災を想定した避難訓練を行い、児童生徒、教職員が迅速に安全に避難できるようにします。

２．危機管理マニュアルの更新・公開：地域や学校の実情に合わせた危機管理マニュアルを作成しています。人事異動や医療機関等の変更の際には、定期的な更新を行い、常に最新版にする必要があります。自然災害時の児童生徒の動静を予め保護者に周知することで、児童生徒・保護者は冷静に避難行動ができます。そのため、危機管理マニュアルを公開することも必要です。

３．防災教育の充実：新潟県防災教育プログラムの活用だけでなく、教科等横断的に防災教育を実施する必要があります。理科学習と関連させ、自然災害の発生メカニズムや対処方法などの正しい知識を習得することで、命を守る行動を冷静かつ迅速に行うことができます。

４．施設の安全確保：学校設備の老朽化や破損が、児童生徒の事故につながる恐れがあります。また、避難経路上の障害物の有無を確認するなど、日常的な校舎校地の点検が必要です。

５．地域・保護者との連携：防災教育の授業や講演会を保護者や地域住民に公開したり、学校での取組を学校だよりやＨＰで紹介したりして、地域全体の防災意識を高め、災害の備えを図るのも、児童生徒の生命を守ることにつながります。

本稿のタイトルは危機管理評論家の佐々淳行氏の言葉です。最悪の事態を想定し、未然防止策と対処策を考えておけば、冷静に対処できるとのことです。私たち教頭は、この言葉を自分事として受け止め、校長の指導の下、児童生徒、職員の安全確保に全力を尽くしていきたいものです。

余談になりますが、当校の４、５年生理科では、ヘチマの替わりに千成ヒョウタンを栽培しています。ヘチマと同じく雌雄異花であり、花粉観察や受粉実験もできます。今後は図工教材としてヒョウタン飾りを作る予定です。ヒョウタンの花言葉は「平和」「幸福」「繁栄」「円満」「夢」です。社会情勢だけでなく自然災害についても、予測困難な時代となってきましたが、世の中が平和であること、子どもたちが幸福であることを心より願ってやみません。

全公教高知大会参加報告

全公教 高知大会に参加して

柏崎市立鯖石小学校
松　井　陽　一

坂本龍馬など多くの偉人を輩出した高知県。現地参集型で参加した全公教高知大会は、天気予報の「予想気温37度」を超える暑（熱）いものでした。

１日目。映画監督の安藤桃子氏による記念講演では、クリエイターの視点から、子供の想像力・創造力の可能性についてお話しいただきました。高知の土地柄に惹かれ、移住を決断した安藤氏のエネルギッシュな語り口が印象的でした。

シンポジウムでは、露口健司氏（愛媛大学大学院教授）をコーディネーターに、藤原文雄氏（国立教育政策研究所部長）、田村千賀氏（千クリエイティブカンパニー代表取締役）、谷智子氏（高知市教育委員会教育委員）の３名による「チーム学校」づくりについての討論が行われました。キーワードは「ウェルビーイング」。子供と教職員、何より教頭のウェルビーイングが高い学校がチームとして機能するとのことでした。「学校は教頭のウェルビーイングを高める場」「教頭は幸せを生み出す存在であってほしい」。シンポジウムの中で語られたこれらの言葉は、教頭としての在り方を振り返る契機となりました。

２日目に参加した第１Ａ分科会では、「教育課程に関する課題」として、岡山県、徳島県の学校から義務教育学校の設立や中高一貫教育の推進における教頭の役割について話題提供をしていただきました。小中、中高という異校種連携に行政が加わる中で、教頭としてどう参画できるのか。グループ協議で見いだした答えは、「ミッションを理解し、人同士をつなぎ、自他の強みを生かして教職員をモチベートする教頭」を目指すことでした。組織の要である教頭だからこそ、学校を取り巻く諸問題に対して前向きでありたいという思いは、全国共通でした。

夜、街ではよさこいチームが間近に迫るよさこい祭りに向け汗を流していました。昼も、夜も、高知の熱量を感じた２日間。全国の教頭先生とつながれたことは財産です。充実した研究大会となりました。

熱気の渦の中で

新潟市立新通小学校
清　野　佳　子

体温を超える気温の中での研究大会でした。肌に突き刺さるような暑さを感じながら会場に向かうと、大通りには「歓迎」の立て看板、会場入り口には高知県内の大勢の教頭先生の出迎え等、至る所に実行委員会の熱い気持ちがあふれていました。

大会日程の中で、各県の教頭先生方と熱く語り合うことができたのは、２日目の分科会でした。分科会の協議の柱「教職員の勤務の実態や働き方」「人材育成」について情報交換を進める中で、話題の中心は働き方改革をいかに推進するかに絞られていきました。他県メンバーからは新潟県・市とは異なる取組が紹介され、とても参考になりました。

例えば、校内メンターチームを設置しているという自治体がありました。意図的なチームの形成によって若手の力量形成を図ることができる。加えて、日々のコミュニケーションの活性化による良好な人間関係の形成、円滑な業務推進、教職員の所属感の向上等が見られるとのことでした。組織的運営の好循環を生み、その結果、教職員が働きやすさや働きがいを感じることができる取組であると感じました。

後半、意見交流が進む中で、複数のグループから「働き方改革の推進＝教職員の増員が必須」との声が挙がりました。私を含め多くの参会者が大きくうなずく中で、講師から「待った！」が掛かりました。「働き方改革とは『業務生産性』を上げることである。人員が増えて業務効率が良くなるのは当たり前。今の人員でいかにより良い教育活動を展開するか。つまり、現状の中でいかに工夫をして教育効果を上げるか。教頭はそのことを考えなければならない。」

講師の熱い言葉に目が覚める思いでした。

教育効果を保ちつつ削減できることはないか。より良い仕事の流れを生み出すために、どのような仕組みや人間関係を構築するか。日々の業務でいかに人材を育成するか。教頭としての責務に、胸を熱くした時間となりました。

特集　我が校の特色的な教育活動紹介

子どもを主語にした学校づくり

妙高市立新井南小学校
関　谷　俊　彦

妙高市では、令和３年度から「妙高型イエナプラン教育」に取り組んでいます。

イエナプラン教育は、一人一人を尊重しながら自律と共生を学ぶオープンモデルの教育であり、「令和の日本型学校教育」の方向と大きく重なります。

当校でもイエナプラン教育のよさを取り入れながら、児童・学校の実態に応じた教育活動を展開することにより、「子どもを主語にした学校づくり」を進めています。具体例を以下に示します。

○　単元内自由進度学習

国語と算数の全ての単元で行っています。授業者は、単元の導入時に、学習目標や主な学習内容をガイダンスします。その後、児童は、「いつ」「どのように（どこで・誰と・何を手掛かりになど）」学習するのか計画を立てて学習に取り組みます。

自分のペース、得意な方法で学びを進める児童、分からないところを友達と相談しながら解決する児童の姿が見られます。

○　異学年児童による学級編制

１～３年生（29人）、４～６年生（28人）の異学年学級を編制しています。理科・社会など一部教科を除いた授業、朝の会や帰りの会といった一日の大半を異学年の児童が共に生活しています。

下学年児童は、上学年児童の優しさから安心感を抱きます。上学年児童には、下学年児童に頼られることにより、自己有用感や責任感が育まれます。

○　幸せな学校づくりに向けた対話・学びの機会

「明日の南小をつくる会」と称した保護者・地域住民・教職員の対話・学びの機会を設けました。

児童にかかわる者同士が互いの思いを共有し、これからの学校の在り方を語り合います。

今後、児童の思いを生かした学校行事等をつくるなど、児童が主体的・自立的に学ぶ学校につながる環境づくりに更に取り組んでいきます。

学校と地域への愛着や誇りを育むふるさと学習

長岡市立大河津小学校
平　出　久美子

信濃川の水を分け、人々に豊かな生活と恵をもたらす大河津分水。大河津を冠とした学校に対する保護者や地域住民の思いは、並々ならぬものがあります。子どもが地域の自然や伝統文化を実体験し、学校と地域への愛着や誇りを育む、ふるさと学習を推進しています。

学区には、地域の方が丹精込めて育てている、ぶどうやブルーベリー農園、広大な水田があります。子どもたちが現地で直接生産者と交流し、果物の収穫や稲作の一連の作業を体験しています。生産者と共に活動する中で、地産地消を広げたいという思いや願いに触れます。収穫した農作物は、家族や生産者、お世話になった地域の方と味わい、農業の魅力を実感していきます。

自然豊かな大河津には、ホタルの生息地域が散在しています。地区会長さんや寺泊水族博物館の学芸員さんにご協力いただき、水田や用水の現地観察・水生生物調査を実施しています。また、トキと自然の学習館で本物のトキを観察し、トキの生息について学びを深めます。実際、佐渡のトキ放鳥に立ち会う子どももいました。

伝統文化の学習では、大河津分水や先人の偉業、伝統音楽への理解を深めています。信濃川大河津分水資料館の職員と連携を図り、現地学習や出前授業を積み重ねます。長岡市を代表して「大河津分水サミット」に参加し、学びを発信しました。今年度は、地域の方に寺泊音頭を教えていただいたり、和太鼓演奏体験をしたりと、地域の伝統音楽を体験することもできました。

今後もふるさと学習を継続・発展させ、学校と地域で子どもたちの豊かな心を育んでいきます。子どもたちに地域への愛着や誇りを育むことにより、地域の将来を担う人材の育成を図るとともに、地域住民とのつながりを深め、自立した地域社会の基盤の構築・活性化を図っていきます。

特集　我が校の特色的な教育活動紹介

「今ここにいることのよさ」を実感

小千谷市立東小千谷小学校
竹　内　智　光

当校の今年度の重点目標は、「自他のいのちを大切にし、今ここにいることのよさを学び続ける子ども」です。

安心して学べる、失敗できる、SOSが出せる、自他を認め合える子どもの育成及び、職員集団の育成を目指しています。

安心して学べるために、協働的な学びをとおして、お互いの考えを聴いたり、伝えたりすることを大切にした授業を展開しています。自分の考えに自信をもって表現し、友達の考えをしっかり聴いて尊重する活動を繰り返すことで、自己理解と他者理解を深めています。また、個別最適な学びを提供できるよう、子どもの実態から授業を構想し、個に応じた適切な指導を進めています。校内研修では、対話的な学びを中心に取り上げ、話し合いの場を設定し、互いの考えを比較し、思考を深める学習過程の工夫について研究しています。

また、全校SSEを効果的に進め、児童によりよい集団づくりのためのスキルを身に付けています。全校集会で教師がモデルになる劇を行い、各教室で劇について振り返り、スキルの練習をします。「挨拶や返事の仕方」「上手な断り方」「思いをことばで伝える」等、SOSが出せること、自他を認め合えること等を育成しています。

さらに、家庭・地域との連携を行い、開かれた学校を目指しています。東小千谷小学校は、来年度、統合100周年を迎えます。児童はもとより、保護者・地域の方と協力しながら進めています。先日、地域の方から歌詞や思い出を募集し、100周年の歌の作成が始まりました。100年に１度のこの機会に、児童をはじめ、保護者や地域との繋がり深めていきたいと考えています。

最後に、教員の一人一人のよさ、強みが発揮できる組織作りを進めています。それぞれの専門性を生かし、他学級に入教して交換授業をしています。また、算数、理科、音楽で教科担任を行うことで、多くの目で子どもを育てています。

以上、どの子も、どこでも、いつでも、全員を大切にすることを目指し、全職員で、今ここにいることのよさを実感できる取組を進めています。

かっぱ班活動

佐渡市立河原田小学校
塙　　丈　昌

佐渡市立河原田小学校は、令和５年度に150周年を迎えた歴史と伝統ある学校です。平成30年の沢根小学校との統合を経て、現在153名の児童が在籍しています。

河原田小学校の伝統ある活動の１つに、かっぱ班活動があります。かっぱ班とは、全校縦割り班の名称で、河原田児童の「河」と「童」を組み合わせて「河童」→「かっぱ」と命名されたそうです。清掃活動、秋の遠足、縦割り班遊びなど、年間を通してかっぱ班での活動が行われていますが、その中の２つをご紹介いたします。

１つは、６月に実施した、ビーチフェスティバルです。前半は、学校の前に広がる河原田海岸の清掃活動、後半は砂像づくりを行いました。砂を固めるために海からバケツで何回も水を運んだり、班の全員が活動に参加できるように声を掛けたりと、例年最高学年のリーダーシップが光る活動となっています。班の全員が力を合わせて完成させた作品の前での記念撮影では、疲れながらもやりきった子どもたちの清々しい笑顔が溢れています。

もう１つは、12月に実施予定のいじめ見逃しゼロ集会です。昨年度は、劇を見た後に、改めるべき行動や自分ができることなどについて、かっぱ班で意見を交流しました。縦割り班での話し合いは、初めての試みでしたが、学年関係なく自由に考えを述べる姿が多く見られ、いじめについて子どもたちが主体的に考えるよい時間となりました。

かっぱ班活動の後の振り返りの時間も大切にしています。班の友達の頑張りやよさを伝え合うことを継続して行うことで、子どもたちの自己肯定感の向上にもつながっています。また、学年の垣根を越えた子どもたち同士のつながりも増えています。

これからも、河原田小学校では、このかっぱ班活動の伝統を大切につなぎ、子どもたち同士の温かい交流の輪を広げていきたいと思います。

郡市教頭会ネットワーク

要としての役割を大切にする教頭会を目指して

三条市小中学校教頭会
会　長　関　　拓　也
（三条市立第三中学校）

三条市小中学校教頭会は、三条市立小学校19校、中学校８校、義務教育学校１校の計28校、31名の副校長・教頭から構成され、このうち小学校１校と義務教育学校に、教頭が２名配属されています。三条市小中学校教頭会の特色を、以下紹介します。

○小中一貫教育の要としての教頭会

周知のように、三条市では平成25年度から全ての中学校区で小中一貫教育の実践を推進してきました。現在各学校の教職員には「小中の連携は当たり前」の認識があります。この背景には、「学園（中学校区の呼称）」のまとまりを生むために、教頭が日々要となって、学校間の連携を取っている姿があります。同じように教頭会の研修の場、運営においても、小学校・中学校の教頭が一緒になって自校の課題解決に向かおうとする姿や、研修を通じて共に学びあう姿が見られています。

○「学園」を越えた連携を進める教頭会

「学園」内の連携は密であっても、「学園」間の結びつきや実態把握にはやや課題が見られます。そこで三条市教頭会では、幹事会、研修部、厚生部の組織を置き、各学園のバランスを取りながら、教頭同士が学園を越えて活動に取り組めるようにしています。また、毎回の定例会における情報交換では、意図的に学園以外の教頭で構成されるグループを編成し、共に解決に向けて考える研修を行っています。

さらに、小中一貫教育の理念を具現化し、各校の教育実践を豊かにするためには、市教委との連携も欠かせません。教頭会の定例会には、毎年数回市教委から指導主事を招き、多様なテーマから指導、助言をいただいて研鑽を積んでいます。

子どもたちのより良い教育環境を整え、地域と共に教職員も生き生きと仕事に取り組める学校づくりの要として、今後も一丸となって研鑽に励みます。

カウンセリング効果の高い教頭会

新発田市小中学校教頭会
会　長　臼　井　政　之
（新発田市立住吉小学校）

令和６年度新発田市小中学校教頭会は、小学校15校、中学校10校、計26名で構成されています。小中合同の活動と共に、小中単独の活動も行っています。

「互いの困り感を共有し合い、高め合う教頭会」を目指して、研鑽と懇親を深めています。

１　小中合同の研修会

(1)「教頭に期待すること」（学校教育課長）

年度始め、学校教育課長からご指導を頂いています。今年度は、困り感を声に出せる同僚性や風通しのよい職員室づくりの大切さについて学びました。

(2)「同和教育の推進」（市教育センター指導主事）

新発田市は人権擁護都市として、人権教育、同和教育を推進しています。講話から、教頭自身の人権感覚を高める努力の大切さを痛感しました。

(3)「子どもたち一人一人と向き合う教育の実現に向けて」（新発田市教育長）

毎年、工藤ひとし教育長を講師に迎え、自らの教育観を見つめ直す機会を頂いています。人を第一に思い大事にする姿勢、子どもから学ぶ謙虚な姿勢をもち続けているか。工藤先生の力強いメッセージが私たちのモチベーションと勇気を高めています。

２　小学校教頭会単独の研修会

(1) 市内の校長先生方を講師に学ぶ研修会

年３回、市校長会長をはじめとする校長先生方を講師に研修会を開いています。教職人生における珠玉のエピソードから、先生方の教育観や人生観、教頭として大切にすべきことについて学んでいます。

(2) 互いの困り感を共有し合う時間

研修会の後半には、教頭としての困り感を出し合い、励まし合う時間を設けています。日頃の悩み事を相談したくてもできない会員にとって「傷をなめ合う」場は大切です。同じ悩みを抱えている仲間がいることは安心感につながります。今後も、カウンセリング効果の高い教頭会を目指していきます。

魅力ある学校づくりに向けて

津南町立津南小学校
齊　藤　亜紀子

本教頭会は、小学校 20 校、中学校 11 校、中等教育学校１校､特別支援学校１校で構成されています。学校の所在地が広範囲で、特色ある教育活動を展開する各校の情報を交換できる教頭会は共通の話題や悩みを出し合う貴重な時間となりました。

今年度は、10 月 30 日（水）に行われる新潟県小中学校教頭研究大会、中越ブロック研究大会主管となり、大会に向けた運営研修と準備を中心に活動を行っています。夏季研修では、大会当日オンラインで勤務校から参加いただくためにオンライン研修、各部進捗情報を確認しました。大会の研究主題

「未来を切り拓く力を育む　魅力ある学校づくり」
～夢や希望に向かい、他者とともに自ら未来を拓く子どもを育む学校づくり～

を基に、会員の皆様と活発な意見交換を行い、教頭会の質と力量を高めていきたいと考えています。

教頭として

新潟市立東石山中学校
土　田　知　之

新しい学校への赴任とともに始まった教頭業務は想像以上に目まぐるしいものでしたが、学校運営の全てに関われるというやりがいを日を重ねる毎に強く実感し、幸せを感じている今日この頃です。

教頭職は、校長の意の具現化や様々な課題解決のために、ヒト・モノ・カネをいかに生かすかというクリエイティブな仕事が魅力の一つだと思います。常に意識していることは、その魅力的な仕事は教頭一人では当然実現不可能であり、教職員や学校に関わる人が納得感をもって「動く」ことによってこそ実現できるということです。そのために、まずは教頭として、前提となる信頼関係の構築を目指し、一人ひとりの声に誠実に耳を傾けることを常に心掛けています。

困ったときは、教頭会の仲間がいつも親切に助けてくれます。教頭会の横のつながりに感謝しながら、これからも精進していきます。

学担教頭となり思うこと

湯沢町立湯沢小学校
和　田　　望

教頭としての半年が終わり、今、強く感じていることは、人がいるということは当たり前ではないことです。１学期に数名の病休者が出て、私が特別支援学級担任をすることになりました。教頭業をしながらの担任は過酷でしたが、校長先生ややる気のある若手、経験豊富な中堅にたくさん助けてもらいました。現在、教員不足は深刻です。私の使命は、働きやすい職場をつくることです。教育活動の精選や業務のスリム化と、馬鹿話も真面目な話も飛び交う職員室にして相談しやすい雰囲気づくりをしたいです。職員間の関係性が向上すれば､「教師は素敵な職業だ」と思える教師も増えるでしょう。そんな思いを実現すべく、まず若手教師数名をキャンプに誘ってみました。焚火を囲んで酒を飲み、多くのことを語り合うことができました。すぐには自分の理想を実現することはできませんが、少しずつ力をつけていきたいと思います。

「心のオアシスになる」

村上市立岩船小学校
加　藤　　僚

教頭として勤務し、５か月になる。これまでと違う職務内容も多く、忙しい日々を送っている。しかし、学校全体を見ると、校長先生のご指導の下、素晴らしい職員のがんばりもあって、よい雰囲気の中で全員が勤務できている。

この職場の雰囲気を維持し、よりよくしていくために、教頭として何ができるのか、この視点を忘れないように心がけている。キーワードは「職員にとっての心のオアシスになる」だ。例えば、職員一人一人との何気ない会話を大切にすること、職員に話しかけられたときには自分の仕事の手を止めて笑顔で対応すること、相談されたことへ対する返答を早くすること等、一人一人の職員に寄り添うことを大切にしている。

これからも教頭としての力量を高め、子どもたちや地域、保護者、職員のために力を尽くしたい。

随　想

『５ｓ×２』
～働きやすい職場のその先に～

糸魚川市立青海小学校
澤　田　　隆

夏季休業中に職員室の清掃や整理・整頓をした。現任校は、私にとって教師のスタートをきった学校であり、棚から当時の学級経営案が出てきて驚いた。30年もの間、職員室に鎮座していたのである。

働きやすい職場には、５ｓ（清掃、清潔、整理、整頓、しつけ）が必要だとよく聞く。異動を伴う教職員にとって、どこに何がどのようにあるのかを把握しておくこと、つまり５ｓをしておくことで、スピーディーかつ安全に仕事ができる。ところが、どんどん新しいものが現場に入り、古い文書や書籍が奥に追いやられ、そのままになっていくことで、どこに何があるのかを把握しきれなくなってしまう学校が多いのではないだろうか。これでは働きやすい職場にはならないだろう。

さて、物的側面から話を進めてきたが、人的側面からはどうだろうか。教職員が働きやすい職場となるよう、管理職が人的な配置をし、働きがいとゆとりをもってもらえるようにすることはいうまでもない。私は教職員に気持ちよく働いてもらうため、５ｓ（さわやかに、しなやかに、素直に、誠実に、ソフトに）をモットーにしている。自分自身にゆとりがないと、この５ｓの対応ができないと考え、月の時間外勤務が45時間を超えないようにマネジメントしている。（え～、そんなことできるの？という声が聞こえてきそうですが…）

いろんなアプリが日々アップデートされるこの時代、教頭が『５ｓ×２』を率先垂範し、「教職員が働きやすい学校」に更新したいものである。その先にある「子どもたちが学びやすい学校」をめざして。

今の自分、これからの自分

燕市立小中川小学校
岸　　亮

新潟県小中学校教頭会会報194号「新入会員の声」において、私は「教頭は職員室の担任」というテーマで寄稿しました。あれから３年が経ち、教頭として２校目である現任校で日々業務と向き合っている今、改めて自分は「職員室の担任」となっているのかについて考えてみました。

まず、職員一人一人に寄り添うことができているかということです。新任教頭の頃から今でも心掛けていることは、職員の訴えに気付いたら自分の手を止め、相手の表情を見て話を聞くということです。どんな些細な相談でもこれは変わりません。若い職員から「教頭先生、話しやすいから何でも話しちゃいます!」と言われた時はとても嬉しく思いました。しかし、「今話しかけていいですか？」「お忙しいところすみません。」と言われることも…。私が忙しそうに見えるということでしょう。まだまだです…。

次に、自分のよさを生かせているかということです。私のよさは、いい意味でバカなところだと思っています。日々職員室でどうでもいいようなバカな話をして職員を笑わせています。出張授業先の教室でも同じように子どもたちを笑顔にしています。ウザがられ、スベることもありますが、これって結構大事なことではないでしょうか。嫌がられない程度に続けていきます。

最後に、これからの自分を考えてみます。大事なのは「信頼されること」です。人としてだけではなく、しっかりと職務を全うすることで、本当の信頼が得られます。真の「職員室の担任」となるために、これからも精進していきます。

新潟県小中学校教頭会
［事務局］
県教頭会ホームページ
全国公立教頭会ホームページ
〒950-0912　新潟市中央区南笹口１－１－38　コープオリンピア笹口205
E-mail　n-kyotoh@crest.ocn.ne.jp　TEL（025）245－5691
https://www.niigata-kyotokai.jp/　FAX（025）245－5692
https://kyotokai.jp/
※令和６年10月９日　事務局移転のため、住所、電話・ファックス番号変更